

# ふかまちのまど

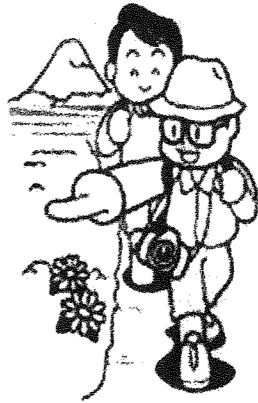
第三五号 二年六月一日  
発行元 深町連合会  
連絡先 六三三九二

## 歩く会(PTA)参加を

歩く会幹事

石井 堂照

三原市本町 大島神社



月 日 六月八日(火)  
予備日 六月十日(木)

### 行程

九時〇〇分 深町上組公民館発(車)  
九時三〇分 宗光寺付近より探訪開始  
十一時三〇分 探訪終了 昼食  
十三時〇〇分 深町上組公民館着(車)

※五月十一日の予定は、コロナのため、  
社会福祉協議会よりの要請もあり、中  
止しました。  
六月もコロナの状況によっては中止  
する場合があります。

町内各団体等の代表者は次の方  
です。

連合会	上町内会	中町内会	下町内会	町民会館	農業振興協議会	水産委員会	深小PTA	深小PTA	如水館	サンライズ	消防団	女性会	はなみずき	壮青会	子ども会	三原市T.B.G.
会長	会長	会長	会長	会長	会長	会長	会長	会長	校長	校長	団長	会長	支部長	会長	会長	会長
天木 雅之	天木 雅之	安藤 志保	池田 充子	天木 雅之	為清 敏治	為清 敏治	坂井 美由紀	徳田 英子	江口 史憲	河野 芳満	渡辺 文雄	迫 強介	村上 孝子	松尾 貞美	西本 薫	島村 ひと美
船本 雄三																

## 深町子どもを守る会

子どもをみんなで  
守りましょう。

深小の子ども



○午後四時前まで下校します。

※下校時間は日によって  
異なることがあります。

○近くで、遠くで、みんなで  
見守りましょう。

○あいさつ  
声かけをしましょう。

## PTAだより

深小PTA会長

徳田 英子

今期のPTA会長をさせて頂く事になりました、徳田英子です。  
日頃より町内会の皆様には、学校運営等のご協力を賜り誠にありがとうございます。

コロナ禍で、これまで当たり前に出ていた事が出来なくなり、先生方も子供たちも保護者の皆様も不安を抱えていらつしやると思いますが、今出来る事に前向きに取り組みながら一歩ずつ進んでいければと思っております。  
何も分かんない迷惑をお掛けするかもしれませんが、自分なりに頑張つて参りますので、一年間宜しくお願い致します。

## T.B.G.協会より

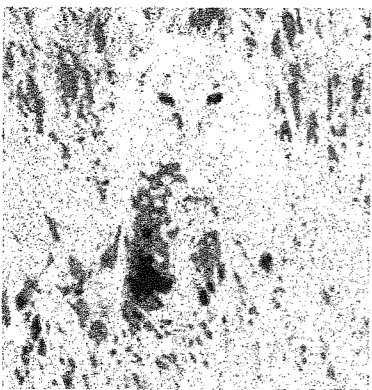


第七回三原市T.B.G.月例会大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の為に中止しました。

次回大会は六月十二日(土)に行います。

T.B.G.協会

会長 船本 雄三  
(TEL 6215488)



フクロウの巣立ちの日

## 深の歴史余話より

深町町内会連合会  
深郷土誌編集室

平成二年(二〇〇〇)八月発行

### 深の伝説

稚子峠の赤子石(上組)

何百年も昔のこと。  
ある年、この地方はじまつて以来というような大飢饉にみまわれた。  
それは、日照り続きに加えて、イナゴ・ウンカが大発生したため被害は大きく、五穀は枯死し、食べ物もなく餓死者も出んばかりになった。  
そして、飢えに苦しんだ農民の犠牲の第一にあげられたのが赤児であった。泣く泣く捨てて子をしたのである。



赤子石(上組)

場所は、上組稚子峠の頂上から東へ百米位下つた林の中。今も供養のための大きな岩石が残っているが、それには子ども足跡のようなものも多く見える。  
のちに、村人はこの岩石を「稚子峠の赤子石」と呼ぶようになった。

「稚子」の地名も、この言い伝えからついたと思われるが、誠にむづかしい話である。

### 七垣内(中組)

今から、およそ千二百年も昔、奈良に都があった頃。

伊予の国(愛媛県)大三島の住人が、理想の土地をさがして、広く諸国をめぐり歩いてきた。

そして、ついに私たちの深の地に足を止め、終世子孫すええま繁栄のころとして、それより開拓に励み、かずかずの困難にもうち勝ち、その努力の効あつて、人がまだ足を入れたこともない原野も、今のような美田となり、豊かな郷土ができたのである。

初めは、鳥獣が作物を食い荒らすので、折角の苦労も水の泡となることもしばしばあつた。困った人々は、いろいろ工夫し、地域毎に鳥や獣が入らぬように垣をめぐらし、そこを住居として、近くをだんだん開いていったという。当時を偲ぶものが、今も七垣内としてその名が残っている。

それは、中垣内・向垣内・平垣内・角垣内・岡垣内・原垣内・山垣内である。



## 謹んでお悔やみ申し上げます

寺岡 幸夫 様 八十九歳  
(上組 辰巳講) 五月十四日  
村井 義雄 様 八十六歳  
(中組 サンヒルス講) 五月十四日

## 深町各種団体六月行事予定

- ◆連合町内会
- ◆ゲートボール大会 十月頃に延期
- ◆上組町内会
- ◆公民館横草刈り (予備日) 二〇日
- ◆小学校
- ◆委員会 七日
- ◆スクールカウンセラー 一〇日
- ◆委員会 一四日
- ◆参観日・学級懇談会(予定) 一八日
- ◆クラブ 二二日
- ◆体力テスト 二八日
- ◆状況により変更する可能性があります。
- ◆如水館中学・高校 一日
- ◆教育実習 二〜八日
- ◆身だしなみチェック週間 二〜八日
- ◆教育振興会総会 四日
- ◆学年朝会(3高) 一六日
- ◆学年朝会(2高) 一七日
- ◆オープンスクール 二〇日
- ◆学年朝会(1高) 二二日
- ◆期末テスト 二九〜七月二日

## 菰ヶ岩(下組)

ずつとずつと昔の話  
ある夜、深の住人頼貞の太平さんの夢枕に、高貴な翁がたつてこよう言われた。「この村の開拓者は私の子孫である。だから、将来永久にこれを見守り、その繁栄と幸福を祈っている。もし、私がこの地に留まることを疑う者は、九文久の岩上に行つてみよ。」と。  
太平さんは大層驚き、夜明けを待つてその地へ急ぎ調べたところ、大きな岩の上に菰が敷かれ、その上に御幣が一基あるのを発見した。これは不思議なこと、太平さんはうやうやしく御幣を捧持して自宅に帰り、早速「社」を建ててこれを安置した。  
この社はのちに、深の守り神「所主権現」として、村民の崇敬するところとなり、毎年旧暦七月十六日には、如何なる凶作の歳も必ず、太鼓踊りを奉納していた。



菰ヶ岩(下組 菰口)

尚、菰ヶ岩は県道拡張のため移動し、現在は下組菰口の入り口の山腹にある

### 地名について

文政二年(一八一九)の深村の古地図には次のような地名がのっている。

上組は、馬路、清国、鳴瀬、中組はキタガ峠、頼貞、中構、千川、下組は迫、カジヤである。

現在の地名はいつの時代に付けられたか不詳だが、明治三一年(一八九八)土地台帳付地図ができた時には明記されており、以来約百年間はこれを呼称している。次に特徴的な地名について書いてみたい。

前出の馬路は今の高下、西側に当る。鳴瀬は、大川(高平川)の流れが瀬となり、快いせせらぎを奏でていたからこの地名が付いたのだろうか。鳴瀬は今成瀬になっている。

阿弥陀平にはかつて立派な阿弥陀堂があり、現在金剛寺本堂にある藤原時代中期の作といわれる来仰阿弥陀像三体が安置されていたという。



よくできているのは、中組の龍王である。ご存知のように干魃の時雨乞いをする山である。この山はどの村にもあったようであるが、村で一番高い山とはかぎらない。深の場合、八幡宮(千川神社)の裏山が龍王の山頂だったから好都合だったと思う。

次に如水館高校が平成六年(一九九四)に、龍王と白土山の地名の所に移転してきた。白土山は、最近まで藨草を染める良質の白い土を産していた。(ブール、テニスコート付近)白土山とはよく考えた地名である。

尚、終戦頃まで、すぐ近く(体育館「第一アリーナ」付近)で、石州瓦によく似た瓦が焼かれていたとの事。

下組には、金堀、金売の地名がある。近くに鉱脈があり、鉱物を採掘し販売していた名残と思われる。

久山田町との境付近に、「平地」という地名がある。ここには、昭和四十年頃まで住居があった。さて、地図には載っていないが、射場という地名が上組にある。その昔、武士が弓を射る練習場だったといわれている。

かつて深を治めていた地頭職石原氏の菩提寺医王山正光寺は、中組の松秋誠治氏宅付近にあった。それもあってか「正光寺へ行く」というと、松秋氏宅へ行くという意味だった。

城主の屋敷地は、周囲の堀の内側に土塁を築いていたので「堀の内」とも「土居」とも呼ばれた。

中組土居講の崎土居昭二氏付近に石原氏が居住していたと考えられる。

地名も不変ではない。太郎谷バypass開通の影響か、最近深へも家を建て移ってくる人が多くなってきた。平成五年(一九九三)には峠を分け中峠ができ、平成九年(一九九七)には、東峠から新たに南峠が誕生した。

### 苗字について(一)

慶応三(一八六七)年十月、將軍徳川慶喜は大政を奉還し、政治は幕藩体制から明治政府へ移った。新政府は、西欧流の新しい国家を造らなければならぬと考へ、次のような政策を矢継早に打ち出した。

- ・明治二(一八六九)年、版籍奉還
- ・明治四(一八七二)年、廃藩置県、戸籍法発令、身分制廃止、新式郵便制度採用
- ・明治五(一八七二)年、戸籍法実施、学制頒布、太陽暦採用
- ・明治六(一八七三)年、地租改正条例公布

また、中世以来農民や商工業者には、苗字の使用は禁止されていたが、明治三(一八七〇)年九月、「平民に苗字の使用を許す」ことを明らかにした。これにより、誰でも自由に好きな苗字を名づけることが可能になった訳である。

しかし、庶民の嗅覚は鋭いといおうか、裏に何かあるのではないかと、疑心暗鬼、苗字の届けは遅々として進まなかった。

ついに、明治八(一八七五)年二月、政府は「平民も必ず苗字を付ける」ことを布告してきた。苗字の強要である。

なぜか、これには理由がある。それは、国民から一様に収税する・国民皆兵の基礎をつくる・階級制を打破する・という国策と関係がある。それには、戸籍をつくるのが肝要となる。

これらのことから、明治新姓は、人権尊重というより「徴税」と「徴兵」を目的にしたものであったといえる。



大山さん 点 描

苗字をつける時は、家族や講中で相談したり、村の学識者である寺子屋の師匠、神主、僧侶、医者などに頼んだりしたという。

次に苗字を整理してみると、地名型、屋号型、職業型、曰く姓型の四つに大別される。その内、地名型は全体の八割で、地名が即苗字になったと思われるものが多い。深を調べてみると、西角(西角)向井(向井)成末(鳴瀬)射場・上射場(射場)頼定(頼貞)大谷(大谷)村上(村上山)山垣内(山垣内)秋永(秋永)国安(国安)金堀(金堀)綱掛(綱掛)迫(迫)迫谷(梶谷)梶谷(カジヤ)である。(一)は地名で、頼定・大谷姓は今はない。

職業型と思われるものに幸谷(紺屋)がある。自給自足の世の中だったので、染め物の紺屋は村で重要な仕事だった。

我が家の苗字にはどのような由来があるのか、調べられるのも一興。

### 苗字について(二)

江戸時代に「苗字帯刀御免」だった人は、公家、武士、僧侶や神主、医者、庄屋、学者それに特別社会に功績のあった者などである。その数はおよそ三百万人。それは、江戸時代の我が国の人口約三千万人の一割にもみたなかったといわれる。

そのような時代においても、百姓町人の中には潜在的に苗字を名乗っていた者が相当あったらしい。というのは、屋号は自由だったので、森田屋、川口屋、高島屋というように、苗字の下に「屋」を付け、うまくカムフラージュしていたようだ。庶民の細やかな抵抗という所か。



絵本 明

深村の場合、江戸時代の古文書に登場する庄屋には苗字はない。又、みんなが苗字を許された明治三・四(一八七〇・一八七二)年の古文書にも苗字はなく名前だけである。

注目は棟札(棟上げの時、工事の由緒、年月日、建築者、工匠などを記して棟木に打ちつける札)である。沖成瀬の観音堂にある棟札の大工の棟梁に苗字が書いてある。藤原姓。棟梁にはそれだけの格式があったのだろうか。

さて、余談だが苗字の教について調べてみたい。同じ読み方でも漢字が違う場合(例えば山元と山本)反対に同じ

漢字でも読み方が違う場合(例えば山崎を「ヤマサキ」「ヤマザキ)などすべてを一姓として計算すると、我が国の苗字はおよそ十四万もの数になるという。おそらく世界一である。

特に多い苗字は、佐藤、鈴木、高橋、伊藤、渡辺等である。珍姓としては、四月一日を(わたぬき)十八女を(さかり)一合戦を、(いちまかせ)一事を(いちご)言語道断を(てくら)など多くあり、一を(イチ、カズ、ハジメ、イチモンジ、ヒトモンジ、ニノマエ)と多様に読ませる苗字もある。

深町では、およそ一七〇の苗字を数える。これは、世帯数の約半分である。

人口十二億人といわれる世界一人口の多い中国にはどのくらいの苗字があるのだろうか。

それが意外や意外、少ないのである。その数は約五百といわれ、同性が何十万人何百万人もいることになる。

お隣の韓国はもつと少なく、約二五〇という。金、李、朴、崔の順になつており、その一族が多くなることとがわかる。どの家もルーツがはっきりしており、大昔から苗字を名乗っていたようだ。

もし、我が国が中国や韓国のように、昔から苗字を名乗っていたら、現在とは比較にならない程その数は少ないと思う。深でも然り。



**ポイ捨て禁止**

ポイ捨て等は条例により禁止されています。  
人口市民局環境課

**ポイ捨てはだめ**

わがまちをこみのない  
きれいなまちに

大のふんは飼いが  
責任を持つてしまつしませう。